

仏師「富小路友学」再攷

長谷洋一

はじめに

本稿で取り上げる「富小路友学」は、美術研究本「大仏師正統系図并末流」(以下、「大仏師系図」)に、七条中仏所二十六代康祐の子息として「康輪同三男法橋 富小路友学祖ナリ」と掲出された仏師である。

周知のように、康祐は黄檗様彫刻を手掛けた京都仏師として知られている。「大仏師系図」によると、康祐には長男二十七代康傳、次男康永、三男康輪がいる。このほか、二十五代康乗の養子となった康慶、「大仏師系図」に記す二十八代康傳も康祐の子息であることが判明している。^①このうち次男康永の没年・事績は全く知られない。

康輪については、すでに江口正尊氏の一連の研究が認められるが、いずれも康輪の黄檗様彫刻に注視した論考で、黄檗宗のその後の展開による造像や他宗派での造像などについては触れられて

いない。さらに後嗣に関しても、五代目友学にあたりとされる「日域大仏師定朝法印三十一世友学康珍」が文化二年(一八〇五)に三重・四天王寺薬師如来坐像を修復した事績を掲げるのみで、友学の系譜についても空白時期が生じている。

父康祐が手掛けた黄檗様彫刻を引き継いで制作したのは、子息のうち、長男康傳と三男康輪である。長男康傳は、元絢編『黒滝潮音和尚年譜』元禄六年(一六九三)の項に「祖巖居士命仏工康伝造調御師像文殊普賢伽藍祖師監齋像供養干本山師感其志」とみえ、^②群馬・不動寺釈迦如来像、文殊・普賢両菩薩像や伽藍・祖師・監齋像を制作したことが記されるが、不動寺諸像以外に黄檗宗関係の彫刻を手掛けた事績は知られない。いっぽう康輪(初代友学)については、作品の銘記や史料から黄檗宗関係の事績が数多く知られる。このことから康祐の黄檗様彫刻が康輪にどのような受け継がれていったのかを知ることができる。また康輪が名乗る「友学」名も後嗣へと受け継がれるが、康輪以後の「友学」は

黄檗宗関係の彫刻を制作したのかどうかについても不明のままである。

江口氏の研究以降、各地で康輪や「友学」の作例が紹介され、また筆者も幾つかの作例を知りえた。そこで本稿では、江口氏の研究に導かれながら、改めて康輪や友学を名乗る後嗣の「富小路友学」の事績について考察したい。

一 康輪（初代友学）

康輪の生年は、群馬・寶林寺釈迦如来坐像の像底銘【資料1】に元禄十年（一六九七）に三十三歳であったと記されることから、寛文五年（一六六五）の生まれである。^⑤ 父康祐（生年・寛永八年（一六三一）^⑥）三十五歳時の出生である。康祐は、生涯に多数の造像を行ったが、黄檗様彫刻の制作は、寛文十年（一六七〇）から延宝二年（一六七四）にかけての福岡・福嚴寺諸像^⑦や寛文七年の静岡・寶林寺諸像^⑧など初期の作例に集中しており、その後の黄檗様彫刻は延宝八年（一六八〇）の埼玉・清善寺釈迦三尊像などに過ぎない。

改めて、父康祐の没年及び子息らの生年を確認すれば、

父康祐	元禄二年（一六八九）没
「康乗之養子」康慶	慶安元年（一六四八）出生
長男二十七代康傳	明暦三年（一六五七）出生
三男 康輪	寛文五年（一六六五）出生

二十八代康傳 延宝五年（一六七七）出生
である。^⑨

康祐が没した元禄二年（一六八九）時、康輪は二十五歳で、康輪の黄檗様彫刻の技法習得は父康祐から受け継がれたと考えられる。

管見の限り、初めて康輪の名がみえるのは、畑治郎右衛門伝来雛型資料の「天台宮様坐像」である。像底に元禄四年（一六九一）二月吉日の年紀と「清水遊学／廿七才」の墨書銘が認められる。^⑩

『堯恕法親王日記』元禄四年二月七日に京都・金仏寺が後白河法皇五百年忌を行うにあたり青蓮院所藏の後白河法皇御影像、妙法院御影堂の木像を画工が臨模したとあること^⑪から「天台宮様坐像」雛型は後白河法皇像雛型の可能性も考えられよう。

雛型を制作した友学と天台宗（比叡山）との関係は明らかにし難いが、二十七歳の康輪が置かれた環境を想定すると以下のように考えられる。

父康祐と二十七代康傳は、ともに日光山などの造像修復の幕府御用に携わっていたが、元禄二年（一六八九）五月の日光山造像において康祐と二十七代康傳父子は、「積方万端不宣」とされた不正を働き、十二ヶ国追放の処分を受ける。康祐は同年十二月に亡くなるが、康傳は犯罪地である下野、住居地の山城（京）のほか摂津、和泉、大和、武蔵、甲斐、駿河、肥前の諸国と東海道

筋・木曾路筋・日光道中が御構場所（居住・立入制限区域）となり、兄康傳は京都不在の身となった。京都に居住していたのは、康慶と康輪そして十五歳の二十八代康傳である。おそらく元禄二年に法橋を叙位した四十二歳の康慶を頼って造像の修業を続けたと考えられる。

次に康輪の名がみえるのは、元禄八年（一六九五）九月刊行の『黒瀧開山潮音老和尚末後事實』の「鳳山瑞在祖山ニ領西堂ノ職命¹³ 仏工遊学ニ刻テ師ノ像ヲ鎮奥之靈嶽ニ」の記述である。『黒瀧開山潮音老和尚末後事實』は、黄檗僧の潮音道海（同年八月二十四日没）の入寂に際して弟子の元福が編んだもので、潮音法嗣の鳳山元瑞（鳳山瑞）が、「祖山」（萬福寺）に登槩した際に仏工友学に命じて師である潮音道海の像を制作、「奥之靈嶽」（黄檗山緑樹院）に安置したとしている。鳳山元瑞（生没年…一六四七年～一七二〇年）が萬福寺に登槩したのは、隠元隆琦の二十三回忌にあたる元禄八年である。

冒頭で触れたように長兄二十七代康傳も元禄六年（一六九三）に潮音道海が開創した上野国・不動寺本尊の釈迦三尊像などの諸像を制作しているが、不動寺以外の黄檗宗関係の造像事績は知られていない。二十七代康傳による黄檗宗関係の造像が少ない理由は、以下の事情によるものと考えられる。

十二ヶ国追放の処分を受けた長兄康傳は、元禄五年（一六九二）四月以降に実施された嚴有院（徳川家綱）十三回忌法要によ

る赦免がなされたとみられ、以降の康傳は「大仏師系図」にうかがえるように「東叡山交衆免許」を所持し、元禄七年の武州・品川東海寺山門十六羅漢像造像や元禄十一年（一六九八）二月の「八重姫君様御入興之御守本尊普賢菩薩御本丸江調進」、同年九月の東叡山（寛永寺）根本中堂・文殊楼の諸像新造や修復、同山王社御神衾の制作調進などに携わっており、幕府御用に復帰したと考えられる。「大仏師系図」で二十七代康傳の事績が赦免後の品川東海寺山門十六羅漢像造像以降の事績しか掲載していないのは、こうした事情があったためとみられる。

不動寺が所在する上野国は御構場所でなく、元禄六年は二十七代康傳の赦免直後にあたり、康傳にとつてさまざま追放以前の状況には至らなかったと考えられる。

潮音道海は、不動寺開創以前に上野国・廣濟寺の住持を務めている。廣濟寺は、館林藩主であった徳川綱吉が寛文九年（一六六九）に萬福寺第二世木庵性瑫を開山に奉じて開いた寺院で、潮音は二代住持として晋山している。『黒滝潮音和尚年譜』によると、寛文十一年（一六七二）に「師四十四歳春室賀総州守命仏工祐法眼造天人師大像佐野吉之丞渡辺平左衛門造迦葉阿難二尊各為祝延邦君鎮子本山也」とあり、廣濟寺本尊として、康祐が館林藩附家老の室賀正俊による天人師像（釈迦如来像）、佐野吉之丞・渡辺平左衛門による迦葉・阿難像を造立するなど、父康祐と潮音道海とは深い親交があったと指摘されている。¹⁶ 康輪は康慶の元を離

れ、赦免直後の長兄康傳とともに父康祐と親交の深い潮音道海を頼って潮音関係の造像に携わったとみられる。

康輪は、潮音道海が没した翌年の元禄九年（一六九六）には、鳳山元瑞撰『潮音禪師語録』巻一の扉に潮音道海の頂相画（図1）を描いている¹⁷。また翌十年には、先に触れた上野国・寶林寺釈迦如来坐像を制作している。

寶林寺は、徳治元年（一二三〇）の開創と伝えられ、寛文七年に中興開山として潮音道海が晋山、二年後には廣濟寺二代住持となっている。延宝八年（一六八〇）に藩主徳川綱吉はわずか二歳の徳松に家督を継がせるが、天和三年（一六八三）に徳松が夭折、そのため館林藩は廢藩となり、藩領は幕領（公儀御料所）となり廣濟寺も取り壊しとなった。廣濟寺の仏像や梵鐘等の什物は寶林寺へ移され、改めて元禄十年に康輪が釈迦如来像を制作している¹⁸。

寶林寺釈迦如来像は、腹前に內衣の紐を表すなど黄檗様彫刻の特徴を示している。こうして康輪は父康祐の後を受けて、黄檗宗との関係を深め黄檗様彫刻を制作していく。

『御用雜記』【資料2】によれば、享保十四年（一七二九）八月二十八日に三十二歳の仏師友学が法橋位を申請しており、仏師友学の生年は元禄十一年（一六九八）となることから、康輪の子息（二代友学）が元禄十一年に誕生したことがわかる。

元禄十六年（一七〇三）には、岐阜・関市千手院（曹洞宗）千

手観音坐像台座・雨宝童子像、春日明神像を制作している。千手観音坐像台座天板上には千手院二世泰梁克玄による朱漆銘【資料3】があり、元禄十六年二月五日に千手観音坐像、雨宝童子像、春日明神像を開眼した旨を記している。いずれの作品も通形の台座、雨宝童子像、春日明神像（難陀龍王像）像であり、特に黄檗様彫刻の特徴はうかがえない。

千手院は、正応二年（一二八八）に関の刀鍛冶「関七流」の兼常氏らが春日神社北隣に千手院を創建、菩提寺としたのが創始とされ²⁰、元禄元年（一六八八）には関・龍泰寺（曹洞宗）十七世天庵正堯を拜請開山とし、二世泰梁克玄が開法道場として再興している。千手院藏棟札には、元禄九年に千手院が焼失したとの記載があり、同年に現在地（西日吉町）に移転したとみられる。千手院千手観音坐像・同台座、雨宝童子像、春日明神像を實見したところ、千手観音坐像像底中央には方形の割りが見られ、また作風も雨宝童子像、春日明神像に比べやや古い要素が認められた。いっぽう銘記のある千手観音坐像台座天板には、像底面の割りに合致する方形突起がなく、天板上面に直接朱漆銘を記している（図2）。このことから元禄九年の火災時に本尊千手観音坐像のみが救出されて移転後も本尊として祀られ、元禄十六年に本尊台座を新調し、同時に雨宝童子像、春日明神像を制作したとみられる。

千手院から北東へ6キロほど離れた徳巖寺（曹洞宗）には、惟

慧道定倚像が安置されている。惟慧道定像の裳裾裏には朱書銘があり、宝永二年（一七〇五）に康輪によって制作されたことがわかる【資料4】²¹。

像主の惟慧道定（生没年…一六三四年～一七一三年）は、初名を長円とし、関・龍泰寺や宇治・興聖寺で修業を続けるも隠元の来朝を聞き、長崎・興福寺にいた隠元のもとに参じ隠元によって法諱を「道定」と改めている。さらに寛文五年（一六六五）二月の木庵の三壇戒会に参じて具足戒を受け、その折に独本性源から隠元所持の念珠を贈呈されている。惟慧道定は、美濃・善応寺にて黄檗式「戒会」の戒師を勤めるなど、黄檗宗に傾倒した曹洞宗の僧侶であった。先の『黒瀧開山潮音老和尚末後事實』の刊行も卷末に「濃州関亀山氏」の真聞、一山、覚天の捨資印施によるものと記されており、黄檗宗と美濃・関との関係が想起できる。

近世曹洞宗において隠元の請来及び黄檗宗の展開は、「曹洞宗に於ても、漸ては道元禪と黄檗禪とが封決され、復古派と進歩派が抗争するに至つたのである」と²²とされて、曹洞宗内部でも復古派（道元禪）と進歩派（黄檗禪）との主導権争いがあつたとされている。

詳細については後日に譲りたいが、近世曹洞宗史において、同宗の主導権が、黄檗宗との交渉を保ち明朝風の規矩を模倣して深く影響を受けた進歩派（容檗派）と教義や清規の面で道元の教えに立ち返る古規復古運動（宗統復古運動）を進めた復古派（反檗

派）とが交互に交代を重ねてきた。進歩派（容檗派）が主流であった時期においては、諷経での木魚の使用や粥罷諷経（朝食後の諷経）を粥前諷経に変更するなど、教義のみならずあらゆる面にわたって黄檗宗を意識した変化が認められる。寺内に安置する仏像も例外でなく、達磨大師像と並置して安置される大権修利菩薩像は、復古派の時期では片手を額横に差しあげて遠くを見るような招宝七郎像であるのに対して、進歩派（容檗派）の時期では、宇治・萬福寺にみる華光菩薩（華光大帝）像が達磨大師像と対になるなどの変化が認められる²³。

進歩派（容檗派）僧であつた惟慧道定が、美濃を中心とした曹洞宗寺院に黄檗宗の影響を及ぼしたことを考えると、惟慧道定像や千手院本尊台座、雨宝童子像、春日明神像の新調が黄檗宗と関係の深い康輪によって行われたのも理解できよう。

康輪は、宝永五年（一七〇八）に山形・普門坊（真言宗豊山派）馬頭観音立像（鎌倉時代制作）を修復している。修復納入文書【資料5】には、「京洛黄檗門下大林禪師 暫飛錫於此地拜謁彼本尊」の文言がみえ、宝永五年春に黄檗僧の大林禪師が普門坊に巡錫した折、再興（修復）の希望があることを知り近隣の有縁、篤信男女とともに、浄財を寄付し京都より仏工友学を山形に招いて修復させたとある。普門坊馬頭観音立像修復にあつても黄檗僧大林禪師の関与による友学の起用が想定できる。修復にあつたのは別文書に「仏師手傳友学弟子兩人」として「善右衛門」

「利兵衛」の名がみえ、友学は二人の弟子を率いて普門坊を来訪したことも知られる。

宝永七年（一七一〇）に康輪は奈良・王龍寺十八羅漢像を制作する²⁶。王龍寺十八羅漢像は、宇治・萬福寺の范道生作十八羅漢像の忠実な模縮像である。そのため王龍寺十八羅漢像の形姿からは、現在では失われた萬福寺伐那婆斯尊者像、阿氏多尊者像などの持物が想定できる。王龍寺十八羅漢像にも萬福寺像にみられる漆線彫や雌型に流し込んだ白土をスタンプ状に貼り付ける装飾が認められている²⁷。

漆線彫による装飾は、萬福寺十八羅漢像や康祐作の福岡・福厳寺迦葉・阿難尊者像にもうかがえ、着衣や着衣端にびっしりと施されるのに対して、王龍寺因揚陀尊像・諾矩羅尊者像にみる漆線彫は、それほど過剰な装飾になっておらず、白土による文様貼り付けも衣端部に適宜配置するなど控えめに加飾しており、加飾法において康祐作品との差異が認められる。

正徳三年（一七一三）には岐阜・正法寺（黄檗宗）千杲性倭像（図3）を制作している【資料6】。江口氏によれば、天和三年（一六三三）に正法寺を開創した広音禪師の肖像彫刻とされるが、面相部をみると、口髭、顎鬚を植毛とし、両耳前から頭頂部を境にして後頭部は頭髪を表している（図4）ことから、萬福寺第六代住持で、正法寺の勸請開山である千杲性倭像とみられる。

先に触れた『御用雑記』の記載から正徳五年（一七一五）、四

十九歳の時に康輪は法橋位を叙位している。父康祐の法橋叙位が寛文二年（一六六二）の三十二歳時、長兄康傳の法橋叙位が延宝九年（天和元年・一六八一）の二十五歳時、歳下の二十八代康傳が正徳三年（一七二三）三十七歳時であったことにくらべて遅い法橋叙位である。

同年から翌六年（享保元年）にかけて康輪は和歌山・粉河寺二十八部衆像を制作している。二十八部衆像のうち毘舍闍立像・金毘羅立像・雷神像の各像内には、「法橋友学康林」、「元祖定朝法印廿六世大藏院法印康祐三男法橋友学入道康林作之」、「京富小路二条」の墨書銘が確認されている【資料7】³⁰。粉河寺は、鎌倉時代より天台宗寺院として発展し、黄檗宗や黄檗僧との関係を全く見いだせないが、黄檗様彫刻の影響をみると、迦楼羅立像・乾闥婆立像の腰甲端には、王龍寺像と同様に漆線彫による文様を適宜配置する装飾法がみられる。

また『新撰往生伝』巻之三上人岸了の項目に「（享保元年七月）八日許³¹居士中川常宇³²之請³³使³⁴良匠友学摸³⁵師道相³⁶十一日始³⁷行臨終儀念佛」とみえており、享保元年七月八日に豪商中川家三代目の中川常宇（一七二四年没）³⁸が「良匠友学」に知恩院四十四世岸了の肖像彫刻を制作させている。

享保六年（一七二一）には、滋賀・永明寺（黄檗宗）白衣観音坐像を制作している【資料8】³⁴。これまで康輪は、肩書に「康祐伴三男」であることを強調した銘記が多くみられたが、ここに至

つて「京師大仏工法橋友学」と名乗っている。

畑治郎右衛門伝来雛型資料中の「菩薩坐像」雛型には「法橋友学作也」の墨書銘があり、³⁶⁾ 形姿の上でも近似しており、白衣観音菩薩像の雛型であるとみられる。

以上、康輪（初代友学）の事績についてみてきた。

康輪は、父康祐から黄檗様彫刻の技法を習得するものの、父康祐と長兄康傳が日光山での不正によって十二ヶ国追放の処分を受け、二十五代康乗の養子となった康慶を頼って造像の修業を続けた。その後父康祐との縁を頼って潮音道海関係の造像に従事し、さらに黄檗宗や黄檗僧の関係や黄檗宗に影響を受けた曹洞宗関係の造像を行っていく。この康輪の造像傾向は、長兄康傳が元禄五年以降の赦免によって幕府御用に復帰し、また二十八代康傳も康慶以降の七条左京家を補佐したことで、黄檗宗や同宗に感化された曹洞宗関係の造像に携わった。

元禄十三年（一七〇〇）には長兄康傳が四十四歳で没し、また二十八代康傳も正徳三年（一七一三）に法橋位を叙位しており、康輪の法橋叙位が正徳五年（一七一五）三月であることからからみて、康輪は法橋叙位以降、黄檗宗や曹洞宗関係に拘泥せずに広く他宗派の造像に参画し、いわゆる京都町仏師のひとりとして造像に携わったと考えられる。

延享二年（一七四五）の『京羽二重大全』『大仏師』に掲載された「富小路押小路上ル町 法橋友学」が康輪であるとみれば、

八十一歳の高齢で、次に述べる二代友学も四十九歳であることから、この頃には、造像の主体者が二代友学に移行したものと思われる。

二 康英（二代友学）の事績

二代友学は、先の『御用雜記』から享保十四年（一七二九）に三十二歳で法橋位に叙位したことから、生年は元禄十一年（一六九七）となる。

康輪（初代友学）が法橋を叙位した正徳五年（一七一五）に、二代友学は宮城・大雄寺伊達成実霊屋の伊達成実像を製作している。像内墨書銘【資料9】では、「友学悴内匠」と記している。³⁷⁾ 伊達成実像に黄檗様彫刻の特徴はまったく認められない。

宝暦十一年（一七六一）には、奈良・世尊寺（曹洞宗）雲門即道像〔図5〕を制作している。世尊寺雲門即道像内墨書銘【資料10】〔図6〕には、京都・富小路二条下ル町に居住する「法橋友学康英」が制作した旨が記されており、「行年六拾四才」としている。このことから法橋叙位後の「友学悴内匠」は康英と名乗ったことがわかる。

『拾遺雲門即道禪師語録』（天明元年（一七八一）刊）には、「宝暦十一年辛巳九月十四日靈鷲山開山肖像安座」とあり、本像が靈鷲山（世尊寺）開山の雲門即道（生没年…一六九一年～一七六五年）の肖像であることが確認でき、雲門即道七十歳時の寿像

であることがわかる。像容は一般の禪宗系僧侶彫刻であるが、朱色の袈裟をまとう点は黄檗僧や曹洞宗容髣派の頂相画に認められ、また雲門即道は、曹洞宗容髣派の独庵玄光が開創した撰津・大道寺の住持を務めており、その影響を受けた袈裟色であったとも考えられる。

宝暦十三年（一七六三）には、京都・真如寺（臨濟宗）毘沙門天像の修復を行っている。『参暇寮日記』には「宝暦十三年（六月）晦日、毘沙門天御修理、大仏師友学へ被 仰付候事」とみえており、前後の記事からは次の修復事情がうかがえる。

京都・今出川飛鳥井町の奈良屋與兵衛は、夢に「大ナル毘沙門天」が現れ、大寺に久しく安置されたままでその存在を知る者もない、「我像を修理造営いたし候て」、諸人に礼拝させるようにせよ、との霊夢を三夜連続でみた。「私宅より東の方の大寺」ということで與兵衛は相国寺を尋ねたところ、真如寺の「大像之毘沙門天」が夢に現れた毘沙門天であった。そこで相国寺は「大像之毘沙門天」を與兵衛に修復させることとし、大仏師友学に修復を仰せつけ、六月十二日に韋駄天堂にて修復後の毘沙門天像を諸人に参拝させたという。³⁸⁾

『参暇寮日記』には、この頃の相国寺お抱え仏師として寺町通押小路下ル町に住む井上喜内が掲出される。井上喜内は「仏師」と記され、弘法大師作毘沙門天前尊の髣部補作、東照宮御神牌の修補など小規模修理に従事し、また本尊并羅漢像の修補について

は仏師宗祐との共同作業で行っている。このため真如寺毘沙門天像修理での「大仏師」友学の起用は、修理の対象が「大像之毘沙門天」であったことによるものと推測される。

このほか康英（二代友学）は同年に京・釜座二条上ル医徳堂への「天竺紫金銅觀音靈像」の寄附、延享三年（一七四六）には萬福寺へ新年の礼に登髣した事績があるとされる。⁴⁰⁾

明和五年（一七六八）『明和新増 京羽二重大全』『大仏師』には、延享版『京羽二重大全』と同じく「富小路押小路上ル町 法橋友学」とみえており、七十一歳の康英（二代友学）である。

康英（二代友学）の事績は、新年の礼に登髣したとされるが、造像からは、黄檗様彫刻及び黄檗宗関係の造像に携わっており、康輪（初代友学）の後半生と同様に京都町仏師の一員として造像に従事していたとみられる。

岩手・芦東山記念館所蔵の年次不詳「書上」には、京都富小路二条下ル所に住した大佛師清水友学（「心月院法眼友学居士」）の没年を天明七年（一七八七）二月九日と記している。「心月院法眼友学居士」（清水友学）が康英（二代友学）であるならば、九十歳の長寿を誇ったことになる。

三 二 其の後の友学

其の後の友学については、断片的な資料しかなく三代友学以降については不分明である。

岐阜県歴史資料館「小池家文書」には、亥（安永八年・一七七九）九月十四日付濃州小池弁柳宛「京富小路通仏工初定朝法印始孫法橋友学」発給の「御注文」が架蔵される。末尾に「京富小路通仏工初定朝法印始孫法橋友学」と記すことから、三代友学とみなすことができる。芦東山記念館所蔵「書上」には「普賢院法橋友学禪定門」として清水勇次郎の名もあがることから俗名清水勇次郎が三代友学に該当するとみられる。天明四年（一七八四）『天明新増 京羽二重大全』には延享版『京羽二重大全』と同じく「富小路押小路上ル町 法橋友学」と掲載されている。同七年（一七八七）には、山形・個人蔵胎蔵界大日如来像の「御註文」【資料11】を發給している。宛名の長大寺（天台宗）は、出羽三山の先達であった寺院である。

芦東山記念館所蔵の年次不詳五月二日付の書状には、清水遊学（友学）の妻清水三川が、「京都大焼け」による全焼で窮状を訴え、富小路へ借家を建てるために金子百疋を仏師友桂から受納した内容が記されている。「京都大焼け」とは、天明八年（一七八八）一月三十日に発生した天明の大火を示すとみられる。

畑治郎右衛門伝来雛型資料には、寛政六年（一七九四）の年紀を伴う「友学康道造」の阿修羅像頭部雛型、「清水友学康道」の日蓮上人坐像雛型がある【資料12】。「友学」名を継ぐことから康道が四代友学にあたと推測できる。さらに文化二年（一八〇五）には「日域大仏師定朝法印三十一世友学康珍」が三重・四天

王寺薬師如来坐像を修復しており【資料13】⁴⁵、友学康珍が五代友学に相当すると思われる。このほか詳細は明らかではないが、宮城・宝泉寺（曹洞宗）には友学作と伝わる釈迦如来坐像が所蔵される。

おわりに

康祐三男の康輪を端緒とする「富小路友学」について諸資料を挙げながらその活動と系譜を確認した。

父康祐は七条左京家棟梁の康乗の後見人となり、二十六代左京と称して七条左京家の分立を招いた。康輪（初代友学）は、父康祐から黄檗様彫刻を含む造像技法を習得するが、元禄二年に父康祐と長兄康傳が十二ヶ国追放を受け、京都の康輪や十三歳の二十八代康傳は既に康乗の養子となっていた康慶を頼って造像修業に努める。元禄五年頃に長兄康傳は赦免を受けて幕府御用に復帰し、康輪は父との関係が深い黄檗宗の彫刻を継承し、また黄檗宗の影響を受けた曹洞宗容檨派の寺院にも造像活動を広げていった。

正徳五年の法橋叙位以後は黄檗宗関係の造像のみならず、天台宗や浄土宗などの造像も手掛け京都町仏師のひとりとして活躍していったことが理解できた。また特定の宗派に拘泥しない造像活動は二代友学康英に引き継がれていったとみられる。

三代友学以降については、資料が断片的で詳細を明らかにする

ことができなかつたが、俗名勇次郎―康道―康珍の系譜を想定され、彼らも京都町仏師の一員として造像活動に従事したと思われる。

こうした動向を見る時、康輪の造像活動は、黄檗様彫刻における最後の光芒を示したものと捉えることができる。

注

- (1) 長谷洋一「康祐没後の近世七条仏師―内證有之ニヨツテ、小佛師交傳相努之―」『関西大学文学論集』六十一巻二号 二〇一年九月。
- (2) 江口正尊「富小路友学祖論攷」(黄檗文化研究所編『黄檗文華』一一八、一九九九年)、同「清水康倫の研究」(北海道医療大学教養部論集)二五、一九九九年)、同「富小路友学試考」(『印度學佛教學研究』三六巻一号、一九八七年)。
- (3) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』(思文閣出版一九八八年)「友学」の項。
- (4) 江口正尊「富小路友学試考」。前掲注(2)。
- (5) 以下、年齢は全て数え年とする。
- (6) 康祐の生年は、「大仏師系図」康祐の項に記す「元禄二年巳十二月二日卒 五十九歳」より算出。
- (7) 『九州社寺シリーズ7』筑後柳川 福嚴禪寺 九州歴史資料館、一九八五年。
- (8) 淺湫毅「初山宝林寺の仏像」『浜松にもたらされた黄檗文化』浜松市博物館、二〇一四年。
- (9) 前掲注(1)。
- (10) 龍谷ミュージアム「特集展示・仏像ひな型の世界Ⅲ」、二〇二二年。
- (11) 妙法院史研究会編『妙法院史料』第二巻(吉川弘文館 一九七七年)。
- (12) 長谷洋一「日光山と仏師民部―元禄から宝暦の修復事業を通して―」『関西大学 哲学』二七号 二〇〇九年。
- (13) 「松ヶ岡文庫所蔵・史料・潮音和尚末後事實」『財団法人松ヶ岡文庫』研究年報第四号 一九九〇年。
- (14) 「大仏師系図」では、品川東海寺十六羅漢像の造像を元禄六年と記すが、調査担当者の山本勉氏が指摘するように元禄七年の造像とみなされる。「東海寺所蔵十六羅漢像」(『平成九年度品川区文化財調査報告書』、品川区教育委員会)。
- (15) 江口正尊「富小路友学試考」。前掲注(2)。
- (16) 江口正尊「潮音禪師と仏師康祐」(『史迹と美術』五七一、一九八七年)。
- (17) 正満英利編『緑樹 潮音禪師三百年遠諱大法会記念誌』、同実行委員会、一九九四年。
- (18) 康祐作上野国・廣濟寺釈迦如来像は、正徳二年(一七二二)に江戸・大慈庵が廣濟寺と改称し、その折に江戸・廣濟寺に移され、宝林寺本尊を康輪が制作したとされる(江口正尊「黄檗信仰史二十七」(『史迹美術同致会』「史迹と美術」六九九号、一九九九年)が、康輪が宝林寺釈迦如来像を制作した元禄十年とは時期が齟齬する。
- (19) 『御用雜記』享保十四年(一七二九)八月二十八日の項。安田富貴子「古浄瑠璃 太夫の受領とその時代」(八木書店 一九九八年)所収。
- (20) 以下、千手院の歴史については『岐阜県の地名』(平凡社 一九八九年)「千手院」の項を参照した。
- (21) 関市教育委員会「新修関市史」『史料編四近世』、二〇〇五年。
- (22) 鏡島元隆「古規復古運動と其思想的背景」(『駒澤大學研究紀要』十六、一九五八年)。

- (23) 関西大学東西学術研究所第十五回研究例会〈東アジア宗教儀礼研究班〉(二〇一七年十二月八日開催)で発表。
- (24) 長坂一郎「山形県長井市普門坊藏木造馬頭観音立像新考―笠間時朝造立字都宮明神本地仏としての検証」『佛教藝術』三四七、二〇一六年。
- (25) 古典彫刻修復室「古典彫刻の修復と研究」創刊号、二〇一四年。
- (26) 京都国立博物館「黄檗の美術 江戸時代の文化を変えたもの」図録、一九九三年。
- (27) 九州国立博物館「没後350年記念 明国からやって来た奇才 仏師 范道生」、二〇二一年。
- (28) 江口正尊「黄檗信仰史六十」(史迹美術同致会『史迹と美術』七五一号、二〇〇五年)。
- (29) 「諸職受領関係資料」延宝九年四月二日「大仏師広伝叙法橋」(安田富貴子「古浄瑠璃・大夫の受領とその時代」、一九九八年)。
- (30) 和歌山県立博物館「国宝 粉河寺縁起と粉河寺の歴史」二〇二〇年。
- (31) 現在は、粉河観音宗本山。
- (32) 『新撰往生伝』卷之三「浄土宗全書」第十七卷「伝記系譜」(山喜房佛書林 一九七四年)五五〇頁。
- (33) 関口静雄「(資料)鞍馬寺所蔵 鞍馬寺融通念仏会再興関係資料」『昭和女子大学紀要 学苑』九〇一号(資料紹介特集号)、二〇一五年。
- (34) 江口正尊「黄檗信仰史二十四」(史迹美術同致会『史迹と美術』六九六号、一九九九年)。
- (35) 「康祐倅」の肩書に注目すれば、畑治郎右衛門伝来雛型資料中の山王神(小比叡)坐像〔康祐倅〕、山王神(客人)坐像〔廿六代康□倅〕、山王神(十禅師)坐像〔康祐倅〕、も友学作の雛型と考えられる。前掲注(10)。
- (36) 前掲註(10)。

仏師「富小路友学」再攷

- (37) 東北古典彫刻修復研究所石井智也氏からのご指示による。
- (38) 『参観寮日記』宝曆十三年五月二十五日・六月朔日・同三日・同六日・同十二日。相國寺史料編纂委員会「相國寺史料」第五卷 相國寺史稿十八(思文閣出版 一九八九年)。
- (39) 『参観寮日記』宝曆十四年二月十二日、明和六年三月十四日。
- (40) 前掲注(3)。
- (41) 「仏師友桂」は当時、一関で活動を行っていた在地仏師の「荻友慶」である。
- (42) 龍谷ミュージアム「特集展示・仏像ひな型の世界」、二〇二〇年。
- (43) 前掲注(10)。
- (44) 三重県編『三重県国宝調査書』、一九三八年。

【付記】

本稿を成すにあたり、東京藝術大学岡田靖氏、千手院橋本絢也住職、関係各位からご示教、ご高配を得た。また写真掲載にあたり、所蔵者からご理解をいただいた。末筆ながら深く感謝申し上げます。

【資料】

御雜掌御中

(1) 群馬・宝林寺釈迦如来坐像像底銘

〔安田富貴子『古浄瑠璃 太夫の受領とその時代』五五〇頁〕

元禄丁丑十季七月祥日

仏工元祖定朝法印二十六世

(3) 岐阜・千手院千手観音坐像台座天板朱漆銘

大仏工左京法印康祐倅三男

佛工 清水友学

源姓清水氏友学入道康倫

雨宝童子 濃州関千手禅院

三十三歳彫刻正与者也

千手観音 二世泰梁叟新造

〔江口正尊「富小路友学試考」

春日明神 元禄十六癸未年

二月廿五日開〔眼脱カ〕訖

(2) 『御用雜記』享保十四年八月二十八日

〔二〇一六年四月一〇日 調査〕

申 法橋 仏師友学三十二歳

勘例

(4) 岐阜・徳巖寺惟慧道定像 裳裾裏朱漆銘

正徳五年三月三日

宝永二酉乙年

法橋父友学四十九歳

佛工定朝法印

口状之覚

二十六世大佛工左京法印

此度仏師友学儀 法橋之儀奉願候

康祐倅三男源姓清水

則親友学儀茂法橋被成下候

氏友學入道康倫

私一家之者之儀二面御座候故

四十一歳彫刻正与者也

乍恐口状書相

十一月吉祥日

添奉願候 以上

〔関市教育委員会『新修関市史』「史料編四近世」

酉八月 大仏師法眼康伝印

万里小路左少弁様

(5) 山形・普門坊 馬頭観音由来文(朱書訂正文)

出羽國置賜郡下永居庄宮村

五所大明神之隨一馬頭觀音

之靈像者往昔雲（朱字 運）慶作而朱

粉嚴飾光彩鮮白也信非凡作

佛如金山巍々堂々難可名也

然中古正嘉戊午歲九月十日

前長門守時朝再興焉云云越

物換星移于今四百五十餘回

故尊像頗荒廢今寶永五戊子

春京洛黃檗門下大林禪師暫

飛錫於此地拜謁彼本尊荐

有尊像再興之悵望故宮小

出兩鄉告有緣男女殊當時

學頭遍照密寺現住法印鏡蕃

并本願別當祥宥受等廻於

一味同體之籌策別檀家棟

翁齋藤氏重正（朱字 正重）法諱

一族並篤信男女結講數以

投三輪清淨世財將宛佛工再

巧料當此時兩鄉檀主戴テ姓名

於冊與若干淨資以為膠漆料

時大林禪師請佛工友學京洛

佛工又應テ自斧鉞而來凡逮

兩年再興悉成允若貝錦斐成

濯色蜀江本尊加持益感衆生

云云最可信可仰施主姓名記別

冊

〔朱字〕別當普門坊

寶永六己丑歲三月吉日 宥受（花押）

法印慶梁謹書

〔長坂一郎〕山形県長井市普門坊藏木造馬頭觀音立像新考―笠間時朝造立字都宮明神本地仏としての検証〔『佛教藝術』三四七〕

〔6〕岐阜・正法寺千呆性佞像 像内背面墨書銘

正德三年

十月吉日

大仏師 友学作

〔二〇一九年八月二十一日 調査〕

〔7〕和歌山・粉河寺二十八部衆像 墨書銘

（毘舍闍立像後頭部内面墨書銘）

元祖定朝法印廿六世

大仏工大藏院法印康祐

三男大仏師法橋友学入道

康林作之

享保庚子年十月日

(金毘羅立像保内背面墨書銘)

元祖定朝法印廿六世

大藏院法印康祐三男

大仏工法橋友学入道康林

作之

京富小路二条住

(雷神像頭部内銘札墨書銘)

元祖定朝法印廿六世大藏院法印

入道康林作之

享保六年辛丑年七月日

〔和歌山県立博物館『国宝 粉河寺縁起と粉河寺の歴史』〕

(8) 滋賀・永明寺白衣觀音坐像 像底墨書銘

京師大仏工法橋友学彫焉

岩佐氏母碧峰榮秀祥尼捨淨財

彫刻大士尊像以布為菩提也

于時□六辛丑拾宿月十八日

江州坂田郡柏原邑

永明禪寺第六代住持嗣法沙門

大徹眞 識

〔江口正尊「黄檗信仰史二十四」(『史迹と美術』六九六号)

(9) 宮城・大雄寺伊達成実靈屋伊達成実像像内墨書銘

大佛工友学

倅内匠

乙 正徳五年 作之

未 七月吉日

〔東北古典彫刻修復研究所石井智也氏からのご教示〕

(10) 奈良・世尊寺雲門即道像 像内墨書銘

余大佛工職之家ニテ成長シ從壯年今

六拾有餘ニ至諸佛像奉彫刻

不知其救今年始 御影

彫刻成滿シ 余佛像ヲ作納ムル

□識之者也 京都富小路二条下ル町住

大佛工

寶曆十一辛巳歲三月二日 法橋友学康英

行年六拾四才

〔二〇一八年七月二十日 調査〕

(11) 個人蔵『御註文』

御註文

但厨子惣長サ六尺位

羽州村山郡長崎柳町

一胎藏界大日如来御長頂上ヨリ御腰迄壹尺八寸五分 壹鉢

長大寺様

右之御臺座木瓜厨子此度新ニ仕立可申事

(二〇一六年一月三十一日 調査)

一御臺座唐様九重座重々彫物念ヲ入地す□□朱塗大橋角々

□□雲水惣地砂子前引込框下框折入地紋連古三方梅菊

(12) 畑治郎右衛門伝来雛型資料 墨書銘

牡丹透ニ彫見事□彫り角々四けつ柱立上ケ裏葵形上框地紋

(阿修羅像頭部雛型背面墨書銘)

布袋連子獅子ニボタン彫物高檻念ヲ入下リ雲上框地紋彫り□

觀音(イ)亦八部衆ノ中ノ阿修羅王也ノ寛政六寅年ノ友学康道造

御ん□う形雲ニ鳳凰之透シ彫物見事ニ彫□□□□框居へ座□□

〔龍谷ミュージアム〕「特集展示…仏像ひな型の世界」

立木透シ彫物唐蓮華式重見事ニ作り其外家伝の通念ヲ入

右下地極堅地ニ仕立真塗惣金箔式返□押仕上

(日蓮上人坐像像底墨書銘)

一舟後光温雲深彫り念ヲ入光之真圓境惣物唐彩色木地繼□□

寛政六寅十月ノ右坂本山王ノ七社権現之内ノ十禪師形ノ清水

釘線メ□之分極堅地真塗惣金箔□返□押念ヲ入□□作法

友学康道ノ日蓮上人ノ左経ノ右扇

之通仕立可申事

〔龍谷ミュージアム〕「特集展示…仏像ひな型の世界Ⅲ」

一木瓜厨子木地ヨリ念ヲ入右同断さび堅地真塗□黒漆□内惣

金箔式返漆押金惣惣八双金□減金惣惣七々子打念ヲ入其外

(13) 三重・四天王寺薬師如来坐像 像内修復銘

作法之通仕立可申事

日域大佛師定朝法印卅一世

上々代金 金三十拾兩

奉再興薬師如来 友学康珍

中 代金 式拾七兩

于時文化二乙丑年三月朔日

右外箱詰綿駄賃代金之外也

〔三重県国宝調査書〕

京富小路二條下ル所

佛工 法橋友學(印)

天明六年午四月十日

仏師「富小路友学」再攷



図2 千手院千手観音坐像 台座銘



図1 潮音道海頂相 『緑樹』より複写



図4 同 千呆性俊像 面部左側面



図3 正法寺 千呆性俊像



図6 同 雲門即道像 体内銘



図5 世尊寺 雲門即道像

A Study of The Kyoto Buddhist statue maker “Yugaku”

HASE Youichi

Kyoto Buddhist statue makers designated as Yugaku are listed in the genealogy of Buddhist image-makers. However, their details are unknown, so this study will present some examples of their work.

The first Yugaku was influenced by his father, Koyu, to create works exhibiting the sculptural characteristics of the Obaku school of Zen Buddhism. His oeuvre includes a 1697 statue of Shakyamuni Buddha at Hourinji Temple in Gunma Prefecture, a 1703 statue of Buddha at Sendein Temple in Gifu Prefecture, and 18 arhats at Ohryuji Temple in Nara Prefecture.

The second Yugaku, also called Koei, was born in 1697 and is believed to have died in 1787.

His works include a 1715 statue of Date Narumi from the Daioji Temple in Miyagi Prefecture and a statue of Unmon Sokudo from Sesonji Temple in Nara.

The Yugaku's achievements after the third generation are unknown. However, the Dainichi Nyorai statue (1787) in a private collection in Yamagata is thought to denote the creation of the third generation.

A work dated 1794 is inscribed with the name Yugaku Kodo. The repair of the statue of Yakushi Nyorai at Shitennoji Temple in Mie Prefecture (1805) is also attributed to Yugaku Korin.

Hence, at least five generations of Buddhist sculptors have assumed the name Yugaku.

キーワード：京都仏師 (Sculptor of Buddhist Images in Kyoto)、黄檗宗 (Obaku sect)、友学 (Yūgaku)、康輪 (Kōrin)